

あって、それ以上のものじゃなかったなあ。溝はあいたままでね。

北野 耀司さんもそうだと思うけど、お客さん切って、完全に孤立するわけにはいかない。でも、こつちには入れないよっていうような、柵しがらみみたいなもん完全にあるしなあ。対象にする人がなければ食えないわけだから。切る勇気ないなあって思うと、割り切れなくて、イライラしてくるよな。

山本 最近、腹立つのはね、中学生とか高校生が、「耀司さん、握手してください」とか「あの子が耀司さんのファンなんで、サインしてあげてください」とか言われるとね。そんなの、勘違い、錯覚じゃない。もうつながらないはずなのに、握手してくださいとかね。もうちょっと別のことやってくるからね、っていうのは本音としてはありますから(笑)。

北野 仕事やっててギリギリしてる時に、演芸場なんかに出たら、客の中にもお前には笑われたくないって奴が必ずいる(笑)。お前は笑うなって(笑)。漫才師は笑ってもらうのが商売だから、みんなにウケりやいいじゃねえかと思うんだけど、何かそういうのが慣れてくるとイライラしてきちゃっ

世の中には官僚みたいになずる奴もいます。もちろんそんな連中とは違いますが、「ずる」と「悪」をもちいていませんか？

北野 でも、俺は自分が2ついるような気がするから、単に自分の中の一人がものつくって、みんなにいいって言われてもうれしさが半分なんだよね。かたつぽに何かやらせて見てる時に味わう快感というのは、一人で全部やった時の半分ぐらゐの感動しかないね。

山本 昔、人からよく言われましたよね。

てね。ヤクザのオヤジに、「ヤクザが笑うな」って言って裏口から逃げたり(笑)。耀司さんの世界もそうだけど、商売をやりたいのか、ただその世界に入りたいたいのかってことがあるよな。デザインって言われることが目的でその世界に入ってくる人もいるし、芸人さんとかタレントなんという言葉が好きでくる奴もいるし。

山本 いっぱいいるんです。僕がやり出した

頃から、原宿の交差点あたりに石投げりや、デザインナーの卵にぶつかるとつらくらいにね。北野 あれ、やっぱり目的はデザインナーって言われることだけなんだね。まあ、若い奴は必ずそれから始まるんだけど。

山本 寄ってくる人たちがね、デザインナーっていうイメージに憧れて寄ってくるのか、それとも僕個人のことを本当に好きで寄ってくるのかわからない時がいっぱいあって、



そういう時に「無茶」をやりたくなくなるんですよ。だから、生きてる目的が、無茶をいかにやるかってことですからね。別に、世界的なデザインナーになってやろうとかっていう、そんなのは、ちよつとカンのいい奴だったら、どんなにこの業界がつまんない世界かわかっているからやんない。やっぱり、カッコイイ女と一緒に暮らして、ドキドキしてた方が絶対いいし(笑)。デザインナーって、なんて言うか、「神秘の城」を築く仕事でしょ(笑)。だけど、とにかく出来上がらないようにしようっていうか、できるだけ格好悪いことしておこうっていう。

北野 自分がね、多重人格とまではいかにいけど、何か二重人格かと思うことがあって、俺自身が、「ビートたけし」っていうのを創って、そいつの友達になつてるような気がしてしょうがない。独りで酒飲みながら、自分で「馬鹿だよなあ。おめえは」とか言ってる。自分を操り人形みたいに楽しんでるところがあって、それが、完全に一体化しちゃうと、にっちもさっちもいなくなると。調子悪い時は、俺じゃない。うまく人形が動き出したら、またその中に入り込んでやったりして、都合よくね。

とくにファッション関係のジャーナリストからね。「耀司さん、何事かひとつに夢中になりなさいよ」って。なれないですよ。やっぱり。どつかでしらけてるから。生まれて初めてパリでショウをやろうって決めた時に、パリでやるんだから日本の着物とか絶対に出さない。逆にヨーロッパの手法でやってやろうと思いました。ほかのデザイン

ーは必ずストリートに日本的な要素を持つてくるわけだから。僕は、明治の前に長崎にやってきた頃のポルトガル人の格好をテーマにしてやったりした。何か、照れちゃってできないことがいっぱいある。それはシヤイとか言うんじゃない、ひねくられてね(笑)。

北野 ひねくれ対二重人格(笑)。やっぱり

外国を意識するとシヤパニーズっていうのが入る。映画でもやっぱり「ちよんまげ」やってた方が喜ぶのはわかかってんだけど、それやれる図々しさがあるかないかが勝負で。でも俺はやだっというか、できない。山本 たけしさん、やんない方でしょ。

北野 やんない、やんない。山本 僕もできないんですよ。